

近藤しいたけ園

調査団体名	: 近藤しいたけ園	団体代表者名	: 近藤圭太
設立年	: 2011(平成23)年	対応してくれた人の名前	: 近藤圭太
団体URL	: http://kondoshiitake.blog.jp/	調査員	: 浜口美穂、蜂須賀功
活動拠点	: 豊田市和合町(下山地区)	レポート作成者	: 蜂須賀功
取材日	: 2014年12月5日		

活動内容

国内で多くの農家が菌床によるハウスで椎茸を栽培しているが、近藤しいたけ園では昔ながらの「味」にこだわり、原木による椎茸を実家の山で栽培している。菌床栽培では4、5ヶ月で収穫できるところ、近藤しいたけ園は原木での栽培により1年半から2年かけてじっくり育て、より自然に近い椎茸を栽培する。しかもそのホダ木(菌をつける原木)は、実家の山や地元の共有林から自ら切り出し調達している。ホダ木から作っているところは全国的に見ても珍しいケース。老木は切っても萌芽更新(切株から芽が出る)しないため、コナラを植林している。その結果、健全な森づくりにもつながり、生物多様性にも貢献している。

年間15万駒の植菌を行い、栽培、収穫、販売すべてを一人で行っている。乾燥椎茸も製造。生椎茸はその日に採れたものをその日に届けることを基本に、産直プラザなどの直売所で委託販売するほか、ファーマーズマーケットなどで直接販売をしている。また、(株)あいのう流通センターに卸売りもしている。

キャッチフレーズ

地産地商(地元で作って地元で売る。)

会のモットー(何を大切にしているか)

「自然に逆らわず、自然の流れの中で育てたい」をモットーに、味、安心、安全を消費者に届ける。

設立から現在に至るまで変化したこと

設立後3年かけて20種以上の椎茸の種菌を栽培し、環境にあった、収穫が多く、おいしい椎茸の栽培を試みる。また、月4回のファーマーズマーケットに出店し、対面による直接販売を行い、お客さんと会話し、お客さんの反応を見ながら、味、価格設定を決めている。

連携している団体・専門家・自治体など

(株)あいのう流通センター、直売所(JAあいち豊田直売所、下山の里、山遊里、小久井農場)、商工会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

採れた椎茸を豊田、岡崎など地元で売ることにこだわっている。おいしいものをおいしい状態で地元の人に食べてもらいたい。(インターネット等を通じて都会への販売は考えていない)

また、ホダ木を採取するため実家の山で木を切った後、その場所に次のホダ木として使えるよう植林している。原木は椎茸栽培者にとって、農業者の「畑」と同じである。椎茸栽培が持続可能になるよう、山を大切に守っていききたい。

現在直面している課題

原木での栽培は、収量が増えないし、時間がかかることが課題である。

また、近年獣害による被害が多くなった。イノシシ、シカは柵を設置することで防げるが、サルには効果があまりないことがわかった。そこで昨年、サル対策として「モンキードッグ」を飼い始めた。しいたけ園内を犬が散歩することで、サルが警戒するようになり、被害を防ぐことにつながる。

今後やってみたいこと

今後もしいたけ園を続けていきたいし、できれば、椎茸を基本に、加工にもチャレンジして、6次産業化にも挑戦してみたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>しいたけ園を始めることになった経緯は？

<答え>

●子どもの頃の原体験

お父さんが森林組合に勤める傍ら、椎茸を栽培していた。山の仕事や椎茸栽培を手伝ったり、遊んだりして、楽しい思い出がある。

●大学時代の椎茸栽培

夏休みを利用し、自分で椎茸を栽培して出荷したところ、他のアルバイトをするよりもお金を稼ぐことができた。また、自然の中で仕事をすることや自分が作ったものを買ってくれる喜びを感じた。

●脱サラし、農業研修

将来、自分で何か仕事をしてみたいと思っていたが、まずは信用金庫でお金の流れを勉強し、脱サラする。その後、豊田市の地域農業後継者育成事業に応募し、矢作川自給村稲穂の里(小原農地管理センター)で農業技術を学ぶ。そこで、有機農業、流通などについて研修を受ける。研修を受ける前は直売所をやりたいと思っていたが、研修を受けて、やっぱり自分で農業をしないとと思い直し、2011年に近藤しいたけ園を設立し、現在にいたる。

写真



コナラの木と近藤さん



原木(太い)での栽培



原木(枝先まで余すことなく使うので細い)での栽培



モンキー犬の空太(くうた)くん